

<実践報告>

松川中学校における「自問清掃」の導入と展開(1)

古川 忠司 下伊那郡松川町立松川中学校
鎌倉 正之 下伊那郡松川町立松川中学校
川根 一仁 下伊那郡松川町立松川中学校
土井 進 信州大学教育学部附属教育実践総合センター

An Introduction and Development of "Jimon Seiso" (Cleaning Activity on Students' Own Initiative and at Their Discretion) in Matsukawa Junior High School(1)

HURUKAWA Tadashi : Matsukawa Junior High School, Matsukawa Town, Shimoina District
KAMAKURA Masayuki : Matsukawa Junior High School, Matsukawa Town, Shimoina District
KAWANE Kazuhito : Matsukawa Junior High School, Matsukawa Town, Shimoina District
DOI Susumu : Faculty of Education, Shinshu University

The purpose of this paper is to report the introduction of "Jimon Seiso" to Matsukawa Junior High School, a cleaning activity originated by Mr. Takao Takeuchi in 1974 to have students clean their school on their initiative and at their discretion. This paper also shows the development and result of "Jimon Seiso" method in Matsukawa Junior High School.

【キーワード】 竹内隆夫 自問清掃 自発性 百匹目の猿 共鳴

1. はじめに

1.1 「自問清掃」との出会い

古川は、平成10年度の中高人事交流によって長野県下伊那農業高等学校から下伊那郡松川町立松川中学校に赴任した。ここで鎌倉正之校長（長野県自問教育の会会長）の教えを受け、心の教育ともいえる「自問清掃」と出会った。知育に偏りがちな現代の学校教育に徳育面を補うには、「自問清掃」が有効であると思うようになり、平成10年9月1日より生徒とともに「自問清掃」の実践に取り組んでいる。

本校が掲げる教育目標は、「自ら考え、正しく判断し、行動できる生徒」である。この目標を実現していくためには、生徒一人ひとりの自主性・自発性を内面から引き出していく指導の実践が不可欠である。それには先ず、指導に当たる教師自身に「生徒を信じて待

つ」という強い信念が要求される。鎌倉校長は「自発性を信じて待つということは管理と放任の狭間の細道を歩むが如し」と述べている。「自問清掃」を導入することは、教師自身が険難の尾根伝いを歩き続けることになるかもしれない。しかし、労を厭わぬ覚悟さえあれば生徒に本来具わっている自主性や自発性を開発し、学校教育目標を現実のものとして実現いく幸運に巡り合える可能性もある。この岐路に立って、中学校での3年間を生徒とともに毎日15分間の「自問清掃」に取り組む道を選択した。本稿では、松川中学校に「自問清掃」を導入した経過と展開について報告する。

1.2 竹内隆夫と「自問清掃」

「自問清掃」は、長野県の教育者である竹内隆夫（1917～）が1936年に長野県師範学校卒業後、県下の小・中学校教諭、校長、県教育委員会教学指導課指導係長等を歴任したのち、最後の勤務校となった中野市立高社中学校において校長として、1974年度から2年間にわたって全校規模で実践した独自の清掃指導の理論である。「自問清掃」は、その後全国各地の小中学校で着実に実践されるようになり、1992年竹内が応募した「自問教育のすすめ」は第41回読売教育賞において、児童・生徒指導部門の最優秀賞を受賞した。

2. 「自問清掃」の導入

2.1 「自問清掃」の理論と方法の学習

平成9年度の松川中学校には生徒指導上の問題が多かった。そのために平成10年度当初の職員会議において鎌倉校長が「自問清掃」を提案したが、「理想論である。教師の指示命令なくして何ができる。そんなものを導入したら学校は益々荒れ收拾がつかなくなる」「自問清掃を導入すると座りにより掃除をしなくなるのではないか」「現在の本校生徒の実態からすると時期尚早ではないか」といった反対意見が矢継ぎ早に出され、とても導入できる環境ではなかった。そこで先ず「自問清掃」の理論を学習することから始めようと考え、竹内隆夫著『自問活動のすすめ—自らの生き方を問う子どもたち—』と斉藤昭著「自問と対話の教育—民主主義確立のために—」の読み合わせを行い、「自問清掃」の理論と方法についての理解を深めた。

2.2 第7回自問教育全国実践交流会への参加による決意

古川（1年2組担任）と川根（2年3組担任）は、平成10年8月1日～2日に長野市で開催された第7回自問教育全国実践交流会に参加した。ここで聴くことができた実践報告から大きな励ましを受け、9月1日から自らの学級に決然として「自問清掃」を導入することを思い立った。そして、平成10年11月から長野県自問教育の会に参加して諸先輩から先進的な実践例を学び、自らの進むべき方向を定めることができた。また、鎌倉校長の長野県自問教育の会会長就任に伴い、古川と川根がその事務局を担当することになった。

2.3 「自問清掃」と「百匹目の猿」の対比

船井幸雄は「世の中を良い方向へ変革するのに一番肝心なのは、良いと思うことを誰かが一刻も早く始めることです。人より早く気づいた人が自ら先行するマイノリティ、つま

り百匹の猿の中の一匹になるべく努めればよいのです。」(注1)と述べている。古川はこのことに大きな勇気とヒントを得て、「自問清掃」を下図のように「百匹目の猿」とリンクさせようと考えた。

自問清掃	百匹目の猿
「自問清掃」を構成する「3つの玉」のうちの「気づき玉」を磨く。(汚れている場所に気づく。)	自分がよいと気づいたことを、まず自分が実行する。
一人ひとりの気づきをお互いに認め合い、支えあえる雰囲気醸成する。(友の気づきを認める。)	「形の間」の形成(一人の実践のすばらしさを集団が認めるようになる。)
友に賛同して自らも実践の輪に加わろうとする。(友の支えに感謝して、自らも支える立場に立てる。)	共鳴(「シンクロニティー」)の誕生(自らもその実践に加わろうとする)

「3つの玉」とは「粘り玉」(意志力)・「気づき玉」(創造力)・「親切玉」(情操)をさし、「自問清掃」の実践を通して人間として高まっていく上で重要な働きをする能力である。個が生き集団が育つ学級づくりを行うためには、百匹の猿の中の一匹になるような、一人の生徒のすぐれた行動を見出し、それを学級集団に共鳴させていくことが重要である。この共鳴の場が学級通信である。

2.4 ニクラスへの「自問清掃」の個別導入(平成10年9月1日)

古川は「梨花」、川根は「楽級通信」というタイトルの学級通信を発行している。これには生徒の毎日の「生活記録」を掲載し、生徒の生きた言葉を借りて担任の理想を展開するという方式を用いている。教師の話はお説教のように捉えがちな生徒も、クラスメートの悩みや不安を交えた生の声には心を開き素直に自問することができる。そういう点で「生活記録」への担任教師からの毎日のコメントとそれを掲載した学級通信は「自問清掃」を推進していくうえでもエンジンの役割を果たしている。古川は9月1日の「梨花」No.90において、「自問清掃」を次のように紹介し、生徒と保護者の理解を求めようとした。

「自問」とは、「自らに問う」、つまり「何を、どのように、どこまでやるかを自分に問い、よりよい方向に向かってみずから判断し、決定する」ことです。それはまず清掃において(「自問清掃」)実践し、全教育活動にまで広げていく活動です。「清掃は環境を美しくすることではなく、自分の心を磨くことである」ととらえ、清掃に対する発想を転換します。そして「指示待ち人間」を脱して、自分で汚れた所、新しい清掃方法を見つけて取り組むのです。その具体的方策として、「三つの玉」を持つのです。①「粘り玉」(喋りたくてもがまんする)②「気づき玉」(汚れた所を見つけたり、新しい清掃方法を考えたり、友達への頑張りに気付ける)③「親切玉」(困っている友達を察して仕事を手伝ったりできる)がそれです。

わが2組では、スローガンとして「三つのチャ・チャ・チャ」(群馬県富岡市立富岡小

学校の実践に学ぶ)を挙げて取り組み始めました。「ロチャック」「本気でチャレンジ」「チャイムまで」を短縮したものです。「無言清掃」と「自問清掃」は喋らないという点では同じですが、先生の指示に従って無言で清掃するだけの「無言清掃」に対して、自分で見つけて主体的に取り組む「自問清掃」は、本質的に内容が異なります。そして無言でいる意味も他者のやる気を邪魔しないためであり、口を閉じていると回りが見えてきて色々なことに気づき、「気働き」ができるのです。

2.5 全校への「自問清掃」の一斉導入（平成 11 年 2 月 15 日）

平成 10 年 9 月 1 日から 2 学級において個別に「自問清掃」が導入されたのであるが、これを学校全体に広げていくことが大きな課題であった。鎌倉校長は全校生徒に対しては校長講話の時間に「自問清掃」についての説明をし説得を続けてきた。また教職員には職員会議の冒頭におけるあいさつのなかで随時「自問清掃」を取り上げ説得を続けてきた。こうした校長の粘り強い説得とリーダーシップのもとで、平成 11 年 2 月 15 日から全校一斉に「自問清掃」を実施することになった。鎌倉校長は 2 月 13 日付の「保護者の皆様」と題する学校だよりで次のように述べた。

松川中学校は今年度、学校開放や地域との交流に力を入れ、「地域を愛し、地域から愛される中学生像」を求めて活動して参りました。一方、学校目標の「自ら考え、正しく判断し、行動できる生徒」の更なる具現を求めて、職員会で一年間研修をして参り、2 月 15 日から自問清掃を導入することになりました。保護者の皆様にも、ご理解とご支援を戴くために、校長講話を配布させて戴きます。

校長講話 「自らの心に問い、自分を成長させる掃除」

（前略）掃除の時間が楽しいと思っている人は少ないと思います。私も中学生時代を思い出してみると、掃除の時間が一番嫌いでした。先生が来ると急にまじめにやり、先生が去るとさぼるという掃除で、掃除自体が嫌いではないのだが、そういう裏表のある自分の態度が嫌だったのです。本校の先生に聞いてみますと、やはり掃除の時間は楽しくないと言います。それは掃除の時さぼっている生徒を注意しなくてはならないので、嫌だというわけです。そこで、生徒も先生ももっと気持ち良く掃除ができないものかと先生方が 1 年間勉強して、2 月 15 日から自問清掃を始めることにしました。

皆さんは大部分の人が、掃除は学校をきれいにするためにやると思っているでしょう。自問清掃はこの考え方を捨てます。自問清掃は、学校のためにやるのではなく、自分のためにやります。自問清掃はどんな清掃かというと、「自らの心に問い、自分を人間として成長させる掃除」です。自問清掃は今から 24 年前、長野県の高社中学校で生まれた掃除です。今、全校で取り組んでいる中学校は長野県にはありませんが、全国にはいくつかあります。（中略）さあ、松川中学校の自問清掃が 2 月 15 日から始まります。意志力を磨いて、自分を成長させましょう。

鎌倉校長のこの宣言を聞いて最も喜んだのは生徒会の美化委員長であった。彼は「自問清掃」に感銘を受け、従来の美化委員会による「指示命令、点検活動」を捨て「自問清掃」

へ積極的に取り組みたいという方針をいち早く明らかにした。その意向に従って美化委員会が中心となって全校の「自問清掃」を展開することになった。これによって教師も一介の作業者となって生徒とともに清掃活動に取り組むことになった。

平成 11 年度からは校内研究組織として、「新教育課程研究委員会」「総合学習研究委員会」に加えて「自問教育研究委員会」が新設され、生徒会美化委員会と連携して「自問清掃」の推進に取り組むことになった。

3. 松川中学校における「自問清掃」の成果

「自問清掃」を導入してからの 1 年半に次のような成果が見られるようになってきた。

(1) 清掃活動の変化と教師の変容

自らの心に問い、自ら判断して清掃を行うことができる生徒が多くなってきた。また教師自身も強制的・指示命令的態度から受容的・共感的態度に変わってきつつある。

(2) 学級での「自治活動」の芽生え

①平成 10 年に丸山学級から「合唱会」が始まった。これは各クラスがショートホームルームの時間に互いに招待しあって合唱する取り組みである。この「合唱会」がもとになり朝夕の学活でクラス・学年の枠を取り払って生徒会主体の合同練習が行われるようになった。在校生の熱心な取り組みと卒業生の思いが共鳴してすばらしい卒業式となった。

②丸山学級と古川学級で「指示待ち人間」にならないための話し合い活動が行われるようになった。

③古川学級では八木重吉の『自分が燃える』という詩を心の支えにして、生徒が 1 年の時より自主的に「テスト予想問題集」「希望」を作成している。これも生徒の自立の一步である。平成 12 年年 1 月からは 1 学年でもこれを取り入れる試みが始まった。これも「百匹目の猿」に「共鳴」した結果であると思われる。

(3) 西駒ヶ岳登山における学年の団結

平成 11 年 7 月 22 日～23 日の西駒ヶ岳登山で突然病人が発生し、引率教師 5 名がその生徒を背負って下山してしまい、残り 7 名の教師で 170 名の生徒を無事下山させることができた。この時の生徒の自立と団結は成長の一端と言える。

(4) 学業成績の向上

「テスト予想問題集」「希望」や「古川ゼミ」（テスト前に学校や生徒の家で学習会を開く）の効果もあって、入学時以来学年 5 学級中最下位の成績であった古川学級が 1 年 9 ヶ月ぶりに学年 3 位に向上してきた。これも自発性を信じて待つ「自問清掃」の成果であると信じている。

(5) クラスの団結

①大クラス旗（2 班×4 班）の作成

平成 11 年年 4 月にバレーボール・クラスマッチに向けて「クラス旗」を作成すること

になった。役員を中心にアイデアをまとめ、赤いハートの中に「絆」の文字が描かれ、それをクラス・マスコットのピンクパンサーが捧げ持っている。その周りに正副担任、生徒が名前を書き入れ、さらには鎌倉校長も名前を記入して下さって完成した。この大クラス旗はクラスマッチや登山などの行事においてクラスの団結のシンボルとなっている。

②クラスビデオの作成

文化祭（「松風祭」）の企画で各クラスの理想や主張を3分間のビデオ作品に仕上げることになった。その時に行った「絆」の人文字はすばらしい出来映えで、放送委員会の文化祭記録にも採用されクラスの団結を象徴するものとなった。

③音楽会での銀賞受賞

「常の稽古を晴れと思う」（『風姿花伝』にある言葉で、「晴れ」とは晴れの舞台のこと）や「今、身のある処に心を置く」をスローガンに朝夕の学活で稽古を重ねた結果、文化祭の音楽会で昨年に引き続き「銀賞」（第2位）を受賞した。

④百人一首クラスマッチで二連覇達成

自分が「百匹目の猿」になるという自覚を持ち、一人ひとりが一首でも多く覚えようと取り組んだ結果、2年連続全校第1位に輝いた。

⑤バスケットボール・クラスマッチでの団結

女子が「ボンボリ」を作成しチアリーダーズを作って応援した。それを男子が見習って発憤し、平成10年度は最下位であったが平成11年度は準優勝を飾った。男女がボンボリを手に夢中で応援し合う姿は感動的であった。

⑥親子レクリエーションとスキー・ツアーの実施

平成10年に引き続いて保護者・生徒が主体となって、平成11年10月24日には親子ボーリング大会と焼き肉会を、平成12年2月13日には志賀高原への親睦スキー・ツアーを計画し、生徒の兄弟姉妹も参加して最高に楽しい一日になった。クラスの「絆」は生徒のみならず親や兄弟姉妹へも広がった。

⑦祖父母への感謝の思いを表現する生徒

M君が書いてくれた「おじいちゃんの前ティアスピリット」（「梨花」186・191号）には、戦後「増野」区を開拓したおじいちゃんが、死ぬ時も最後まで畑を日陰にする木を切っていて下敷きになってしまったことから、その「開拓の心」に感謝し後継者としての自覚を持てたことが表れていた。それに「共鳴」したクラスの仲間もおじいちゃんやおばあちゃんの思い出を書いてくれた。

4. 「自問清掃」見返しのための公開授業

4.1 公開授業の内容

①日時：平成12年1月24日（月）第6時限 授業者：古川忠司

指導講師：山本健治（元大阪府議会議員、『すべての一歩は掃除から』の著者）

実施クラス：2年2組（古川学級）男子20名，女子14名，計34名

②授業の主眼

資料として提示した「生活記録」の記述を読み，奉仕活動の意義を考えるとともに「自問清掃」についての「見返し」を行う。

③評価の観点

- ・資料として取り上げた「生活記録」は奉仕活動の意義を考えさせるのに有効であったか。
- ・奉仕活動も自らの心を磨くことであることを理解し，奉仕活動や「自問清掃」への活動意欲を高めることができたか。

④発問

ア 料①・②を読んで，自分の奉仕活動の経験と重ね合わせて思ったことを書いてください。

イ 資料③を読んで，自発的に清掃活動をして下さる方々はどのような気持ちで活動しておられるか，自分の活動と重ね合わせて書いて下さい。

ウ 本当にゴミのポイ捨てが多くその大部分が一部の心ない人々の出すゴミかもしれません。でもそのことに苛立ったり脱力感を抱いて活動をやめたらどうなるのでしょうか。

エ 資料④を読んで，「自問清掃」の大切な点について書いて下さい。

オ 資料⑤を読んで，私たちが取り組んでいる「自問清掃」の考えにたって，奉仕活動にどのような気持ちで取り組んだらいいか，自分の考えを書いて下さい。

⑤資料

- ・資料①【梨花】252号（平成11年5月13日発行）

「今日旭ヶ丘中学校で練習試合がありました。帰る時は電車に乗り大島駅に着きました。そして，フッ！と溝を見てみると，そこには電池やお菓子の包み紙が捨ててありました。そこはおととい僕たちが一生懸命掃除をした所でした。それなのにもうこんなにゴミが落ちているとは，マナーの悪い人たちが居るんだあととても残念でした。大勢の人たちが使う所なのできれいにしていくよう心掛けて欲しいと思います。」と H 君が悲しい思いを書いてくれました。県道に面した H 君の家の畑の様子についてお母さんは，「家の畑にも空き缶，空きビンが投げ捨てられているのを見ると悲しくなります。」と書いて下さいました。

- ・資料②【梨花】252号（同上）

「今日の朝は『環境美化作業』が名子地区でありました。私がゴミを拾うために歩いてきた道には結構ゴミが落ちていました。道というより道端の草むらにほとんど落ちていました。アメやガムの紙屑やお菓子の袋などが落ちていましたが，特に多く落ちていたのはタバコの吸い殻とタバコの空き箱や袋でした。『何で大人が出したゴミなのに子どもが拾って集めなきゃいけないのかなあ』と思いました。他のゴミもそうです。『自分で出したゴミなんだから自分できちんと捨ててよ！』と思いました。一番悪いのはやはりタバコのポイ捨てだと思います。」と K さんが書いてくれました。緒形拳が出演した

『大人にだけ許された権利だから私は決して捨てない!』と言ってタバコを燻らせる C M の存在。

・資料③【梨花】357号（平成11年11月1日発行）

「家に帰る途中で何となく右の方を見ると、ゴミが多くある歩道をどこかのおじさんが掃除していました。自分でゴミを捨てたわけでもないし、誰かに言われたわけでもない。本当にすごいと思った。」と Y 君が書いてくれました。

・資料④【梨花】388号（平成11年12月13日発行）

「今日の掃除終了の時、一年生の分担の場所（階段）がけっこう汚れていたんだけど、一年生は保護者の学年集会があり今日は清掃がなかった。私は気にもとめず自分の分担のトイレをやっていると、N ちゃんと M ちゃんが二人で一年生の分担の所をきれいにしていました。やっぱり副会長になる人は違うなあと思いました。『代わろうか?』と言った時も『大丈夫!』と言って清掃の時間が過ぎても磨いていました。さすがだなあと思いました。まじめな N ちゃんだからいろいろなことに協力してあげたいです。」と K さんが書いてくれました。

・資料⑤【梨花】397号（平成11年12月24日発行）

「前から高本先生が1人で校庭のはずれのゴミ捨て場所の清掃をやっていたので、今日は土曜日だから M 君の提案で放課後有志で掃除することになった。実際にやってみると大変で、1時間以上やったのにほんの少しだけゴミの山を移動できただけで、少ししかきれいになりませんでした。S 君や W 君や H 君も手伝ってくれました。ありがとうございます。本当はもう少し人手が欲しかったです。掃除の時間などを使ってきれいにし続けていきたいと思います。」と T 君が書いてくれました。

4.2 授業研究会の記録

(1) 授業者の反省

今回は“奉仕”について「生活記録」に書かれた級友の思いを資料とし、そのことについて一緒に考え、それぞれの思いを述べていく授業形態をとった。生徒は仲間の思いを真剣に考え意見を述べてくれた。教師が予想もしないような意見も出て、生徒の思いの深さと共鳴する力の強さに感動した。

(2) 授業参観者から出された意見

① 2組の子供達が真剣に思いを書き綴っている姿に感動した。

② 子供達の学習態度が素晴らしい。なかなか仲間の考えを真剣に考える中学生は少ない。

2組の生徒はしっかりと落ち着いて真剣に学習している。仲間同士の絆、古川先生との絆ができているからこのような授業が仕組めるのであろう。

③ 最初の K 君の発言が素晴らしい。「自分は空缶を捨ててしまった事がある。」という自己反省をみんなの前で言うということは勇気のいることだ。学級の仲間に対する安心感がなければ言えないことだ。自分の正直な姿が出ていた。

④ 学習の深まりは「①現状把握→②なぜそうなったのか?→③これからの方向を探りあ

う」という形で進んでいくが、今回のようなみんなが考え、その考えを発表しあい、その発表をみんなで味わう授業もよいものだった。

- ⑤先生と一緒に考え、生徒と同じようにカードに記入し、先生も考えを述べる。このような授業もよいと思った。このような方法で行うと、先生の考えが答えになってしまいがちだが、今回は教師として生徒に考えを押しつけるようなところがなかった。生徒と一緒に考える姿は生徒に真剣に考えることの大切さを教えることになったと思う。
- ⑥なぜ自問教育に“奉仕”をもってきたのか？

(回答) 2組の生徒はかなり「自問清掃」ができています。学級には奉仕活動を真剣に考え実施している生徒が多数いて、奉仕活動を真剣に考える機会であったから。また奉仕活動は最終的には“自己の心を磨く”という点で“自問”と共通すると思われるから。

- ⑦資料がすばらしい。仲間のすばらしさに共感することができたであろう。
- ⑧資料の扱い方で、資料①②の扱いでは“善”と“悪”に分けすぎではないか。自分たちを善とし周りを悪としすぎると、自己に問いかける自問教育につながらないことにもなるのではないか。

(3) 指導講師の指導

- ①先生の質問に対して生徒が真剣に考える姿がすばらしい。学級の雰囲気がいい。
- ②資料①のあとのK君の「空缶を捨ててしまった」という意見を発展させていくとおもしろかったのではないか。

(4) 鎌倉校長の指導

- ①本時の授業の流れは、資料①②で周りの批判→資料⑧で共感→そして資料④⑥で自己を見つめることにつながったか。深まりはどうだったか。ここを係において生徒の記録をもとに分析してほしい。

(5) 公開授業のまとめ

- ①道徳の授業で最も大切なことは、生徒が課題をもって真剣に考えることである。そうすることが自己へ問いかける行動となり実践へとつながっていく。そして、実践につながったとき自分の力が伸びていることに気づき喜びが持てる。そこで重要なことは、生徒が課題をもち真剣に考えることができる資料を選定することである。このような資料は教師が感動できる資料でもある。また、日頃から教師の働きかけや自問清掃の実践などを通して、自己に問いかけをする生徒を育てていくことが重要である。
- ②仲間の良さを見つけ、素直に認め、仲間から学んでいくことが自己の成長につながることを自覚できる生徒に育てることが重要である。また、人それぞれの個性の違いを受け入れていく寛容の心を育てていくことが重要である。このためには日頃から仲間の良さを教師や仲間が気づき、認め、共感しあっていくことが大切である。
- ③課題をじっくり考え、自分の思いを語ることでできる生徒が育つようにするためには教師自身も授業づくりにおいて研究課題をもち、それに向かって努力している姿を通し

て生徒に語りかけていくことが大事である。

④授業の主眼を明確にするとともに、発問の工夫・資料の整理と扱い方の工夫に努めることが大事である。

5. 今後の課題

- ①「自問清掃」において生徒が座れない理由として、「喋っていることに気づけない」「先生の目を気にしている」ことが挙げられる。教師自身が「座り」の意味をよく理解して「人に迷惑をかけていることの方が考えるべきことである」ことを生徒に示す必要がある。その際「褒められたいからやる」ではダメであるから、座った生徒に対して「うれしかったなあ」と耳元で囁くなど、生徒の勇気ある行動への感動を伝えることが大切である。
- ②「自問清掃」に対する個々の生徒の自覚がアンバランスであるから、生徒には「自問清掃」の趣旨を繰り返し説明しながら、「共鳴」(シンクロニシティ)が生まれるのを待つ心のゆとりを大切にしていきたい。
- ③「自問清掃」の見返しをきちんと行って、生徒の心の成長を把握していかないとマンネリ化や惰性に流されてしまう危険性が付きまとっている。この課題に対処していくためには、教師は一人ひとりの生徒の「生活記録」を通じた対話の労を惜しまず、それを学級通信によって生徒と保護者に広げる地道な作業を続けていくことが重要である。
- ④「生徒の自発性を信じて待つ」という「自問清掃」との出会いは教員生活において画期的な出来事であった。「自問清掃」によって培われた課題を見つける力や意志力、情操力を基盤に、21世紀の我が国の学校教育改革の眼目である「総合的な学習の時間」のカリキュラム開発を行っていくことが今後の重要な研究課題である。

【引用参考文献】

(注1) 船井幸雄(平成8年)『百匹目の猿―「思い」が世界を変える―』サンマーク出版 p. 27

斎藤 昭(平成8年)「自問と対話の教育―民主主義確立のために―」三重大学教育学部紀要第47巻

鈴木秀三郎著、竹内隆夫監修(平成8年)『いじめ不登校はこの方法で直った―自問教育の実践―』日本教育新聞社

竹内隆夫(平成3年)『自問活動のすすめ―自らの生き方を問う子どもたち―』第一法規出版

竹内隆夫(平成7年)『自問活動への手引き―新たな発想による清掃活動―一人としての成長を願って―』日本教育新聞社

古川忠司(平成11年)『梨花1号～225号 松川中学校1年2組の歩み』

古川忠司(平成12年)『梨花226号～450号 松川中学校2年2組の歩み』

喰代栄一(平成8年)『なぜそれは起こるのか―過去に共鳴する現在―』サンマーク出版

山本健治(平成10年)『すべての一歩は掃除から』日本実業出版